

## 古英詩『アンデレ』(一)

藤原保明訳

## まえがき

『アンデレ』(*Andreas*) という名で知られている古英詩は、聖アンデレが食人族に捕らえられている聖マタイを神の命により救い出し、食人族をキリスト教に改宗させるという伝説に基づいて作られたものである。詩人は十二使徒にまつわる物語の一つであるギリシア語の外典『アンデレおよびマタイの行状録』ないしはこのラテン語訳を典拠にしているが、他の古英語の宗教詩の場合と同様、原典をそっくりパラフレーズしたのではなく、取捨選択し、さらに英雄詩の韻律や口誦定型の伝統に則った語句や表現を駆使し、活力みなぎる作品に仕上げている。ちなみに、アンデレ伝説は古英語の散文にも二点残されているが、この詩の直接の出所とはなりえないと言われている (Brooks 1961: xv-xviii)。

この詩は「ヴェルチェルリ写本」に収録されている六編の詩の冒頭にあり、1722 行から成る。作品全体は内容上 15 節に分けられる。作品の梗概は—アンデレは神の命令に従い、食人族に捕らえられ危機一髪の状態にある聖マタイを救出するためにメルメドーニアに旅するが、サタンの陰謀によって食人族に苦しめられる。アンデレは奇跡によって洪水を起こし、彼らの行為の間違いに気づかせる。彼らを改宗させ、真の信仰を身につけさせた後、帰路につく。かつて食人族であった人々が神を称える歌を合唱するところで終わる—というものであるが、今回訳出したのは作品の冒頭から全体の三分の一強の 600 行までで、アンデレが航海の途中船頭に扮した神と対話する箇所途中までである。なお、今回の翻訳では底本として Brooks 版を用いたが、参考文献に記した他の版等も適宜参照した。

この詩の作者と成立時期等について付記しておきたい。写本でこの詩の次に位置する『使徒の運命』(*The Fates of the Apostles*) にはキネウルフ (Cynewulf) の署名が入っていて、その末尾の部分 (96-122 行) が『アンデレ』の結末だとする根拠に基づいて、『アンデレ』をキネウルフ作とみなす説もかつてはあった。しかし、特定の語や文法形式の使い方、神の概念、文構造、ヴァリエーションの使い方などは両作品では対照的であることから、現在では両者は別々

の詩人の手になるものと考えられている。『アンデレ』は韻律上の証拠からすると、キネウルフの署名入りの四編の古英詩よりも『ベオウルフ』に近いが、成立時期に関して言うと、キネウルフの作品群よりも遅く、九世紀の中頃以降から十世紀の後半ないしは末までの間に書かれたものと思われる (Krapp 1932 : xvi; Brooks 1961:xviii-xxii)。『アンデレ』の物語の構成は『ベオウルフ』の前半の場合ときわめてよく似ていること、語も句も両者では似たものが多いことなどから、これまで両作品の関係についてさまざまな研究や議論がなされてきた。しかし、『アンデレ』の詩人が『ベオウルフ』にどの程度依存していたかあるいはしていなかったかについては確かなことは分らない。その理由は、これらの詩の中での出来事や状況は、たとえばギリシア語版にも見られること、さらに、古英詩は定型や口誦という伝統に強く根ざしているため、一つの詩の作者が他の特定の詩を知っていたと主張することが実質的に不可能だからである。

## 古英詩『アンデレ』

### I

さて、遠い昔、十二人の名高い英雄たち<sup>1</sup>、主の従者たちが星の下にいたことを私たちは伝え聞いている。彼らの勇気は軍旗がぶつかり合う戦において衰えることはなく、天の偉大なる王であられる神みずからが課せられたために従い<sup>2</sup>彼らが別れ別れになった後も衰えることはなかった。(1-6)

彼らはこの世で高名な人々であり、戦闘の場で、運命の広場において、盾と手が兜を守った時、勇猛で果敢な隊長となり、勇ましい戦士となった。マタイ<sup>3</sup>はそのうちの一人であり、驚くべき技を用いてユダヤ人の中で初めて言葉で福音を書き記した。聖なる神はその島<sup>4</sup>に彼の運命を割り当てられたが、そこではこれまでいかなる異国人も家庭の幸福を味わうことはできなかった。その国では、戦の場で殺害者たちの手がしばしば異国人たちに激しく襲いかかったか

<sup>1</sup> キリストの弟子の十二使徒のこと。

<sup>2</sup> 古英語の散文版ではすべて、「使徒たちはくじを引いて伝道の地を決めた」となっている (Brooks 1961:61)。

<sup>3</sup> キリストの召命をうけて即座にキリストに従い、十二使徒の一人に選ばれた。しかし、聖書の中では彼の伝道について記されていない。

<sup>4</sup> 狭義の島ではなく、海に囲まれた陸地を指す (Gordon 1954:181)。

らである。(7-18)

その地域、すなわち、人々が居留する場所、戦士たちの住まいは、恐るべき行為、悪魔の奸計ですっかり取り囲まれていた。その国では人々の口に入るパンという食べ物はなく、水という飲み物にも恵まれておらず、住民は国の至る所で遠くから来た人々の血と皮と肉を口にしていた。食料がなくなると、外からその島を訪れた異国の人々を全員食べ物とするのが彼らの習慣であった。野蛮な迫害者である彼らは顔の宝石<sup>5</sup>を残酷にも槍の先で突いて潰したが、これはこの国の人々の野蛮な印、邪悪な者たちの暴力行為であった。その後、魔術師たちは妖術を用い、住民のために気味の悪い飲み物を苦心して調合した。それは人々の理性と知力と胸の中の心を狂わせた。そのために彼らの心は歪められ、血に飢えた者たちは人間としての楽しみを求めず、食料不足によって弱り果て、干草と葉に苦しめられた。(19-39)

その頃、マタイは悪名高いその町へ、皆の中へとやってきていた。悪魔の手下たちがこの勇士の旅を耳にした時、メルメドニア<sup>6</sup>中が大騒ぎとなり、罪深い者たちが集まり、呪われた者たちが群がった。彼らは直ちに槍を構え、盾を携え、マタイの方へと向かった。怒り狂った槍兵たちは戦を全くためらわなかった。地獄へ落ちて行く者たちは悪魔の技によってその場で聖者の両手を縛って動けなくし、彼の顔の太陽<sup>7</sup>を剣の先で潰した。そして、彼は恐ろしい毒を一服飲まされた。しかし、それでも彼は天の王国の守護者を胸の中で心から称えた。神の祝福を受け、毅然とした彼は牢獄から聖なる声を精一杯張り上げ、栄光の主を、天の王国の守護者を言葉に出して称賛した。彼の心の中にはキリストへの賛美がしっかりと根付いていた。(40-58)

彼は悲し涙を流しながら、悲しみにあふれる言葉で、苦渋に満ちた声で、勝利の主に、人々の王に、慈悲深い万軍の神に話しかけ、言葉に出して次のように言った。「ご覧ください。見知らぬ者たちが厳しい悪意の鎖と策略の罟を私に掛けています。私はこれまでずっと、どんなことがあっても、心から喜んで主のご意志に従ってまいりました。しかし、これからは厳しい試練の中を口のきけない家畜のように振舞わねばなりません。万民の考えを、胸の中の思いを

<sup>5</sup> 「目」のこと。

<sup>6</sup> Mermedonia は当時のギリシア人にとって未開で野蛮な地であった黒海と接するスキタイ (Scythia) と総称されていた国と思われる (Brooks 1961:xxvii-xxx)。

<sup>7</sup> 「目」のこと。

ご存知なのは人類の支配者であられる主だけです。栄光の主よ、敵が武器の尖端で、剣で私を殺すのが主のご意志なのでしたら、天使たちへの幸福の授与者であり万軍の英雄であられる私の神が放浪者である私に宣告なさることに私は直ちに喜んで耐えるつもりです。全能の神よ、私を憐れんでこの世で光を与えてください。私は剣の憎むべき仕業によってこの町で光を奪われましたが、もうこれ以上血に飢えた厭わしい敵どもの罵声を浴びなくてすむように、軽蔑に満ちた言葉に耐えなくていいようにしてください。この世の守護者よ、私は自分の心を、不変の愛を主だけに捧げます。天使たちの父よ、幸福の輝く授与者よ、お願いがあります。人々の審判であられる主よ、罪深い敵の中で、呪われた悪の仕掛け人たちの中で、私をこの世で最悪の死へと定めないでください。」

(59-87)

この言葉の後、明るい太陽のように輝く神聖なる印が天上からその牢獄を訪れた。その時、聖なる神が彼に救いの手を差し伸べられたことが告げられた。続いて、空の下では天上の王の神々しい声、栄光の主のよく響く話し声が聞かれた。主は戦で勇敢な牢獄の従者に澄んだ声で安全と救済を次のように告げられた。(88-96)

「マタイよ、おまえに天の下での平和を与えてやろう。胸の中で恐れすぎではならぬ。心の内で嘆くでない。私はおまえと共に留まり、おまえと、それからおまえと共に恐ろしい束縛の中にいるすべての群衆を捕らわれの状態から解放してやろう。おまえのために天国が、最も輝かしい栄光が、最も快適な住まいが、最も楽しい輝く家が聖なる力によって開かれるであろう。おまえはそこで末長く栄光への望みを味わえる。人々からの迫害に耐えよ。裏切り者たち、罪深い者たちが残酷な束縛によって、策略を用いておまえを苦しめることのできる時間は長くはない。異教徒の町でおまえを守り、慰めるために直ちにアンデレをおまえの元へ遣わそう。彼はこの迫害からおまえを解放してくれるであろう。おまえがこの束縛から逃れられる時まで、日数で勘定するとちょうど二十七夜の期間がある。おまえは苦痛に虐げられているが、勝利に称えられ、迫害から逃れ、神の保護に入ることになる。」(97-117)

すべての被造物の聖なる守護者、天使たちの創造主は、それから天上の故郷へと去って行かれた。主はいかなる場所においても真の王であり、確かな導き手であられる。(118-121)

## II

すると、マタイは再び大いに勇気づけられた。夜のとばりは消え、早々と去って行った。そして、夜明けの使者である光が訪れた。兵士たちは集まった。異教の残忍な戦士たちは盾をかざし、隊を成して集結した一甲冑はきしみ、槍は音を立てた。牢獄の中で足枷に固定されて恠しい住まいにしばらく留まっている者たちが生きているのかどうか、一定の期間を経た後、食べ物としてだれの命を最初に奪えるのか、彼らは確かめたいと思った。殺害に飢えた者たちは、捕虜たちがこの国の飢えた者たちの食料となるのはいつであるべきか、捕虜の期間を計算して書き物の中に記していた。(122-137)

残忍な心の持ち主たちは叫び声を上げ、次々と群れをなしてやってきた。荒々しい指導者たちは正義や主の恩寵を気かけなかった。彼らは呪われた者たち<sup>8</sup>の力を信じていたので、彼らの心は悪魔の教えによってしばしば曇った。さて、彼らは心に分別を蓄えた者、聖なる男を暗い部屋の中で見つけた一輝く王、天使たちの統率者が遣わそうと望まれた戦に勇敢な男を彼は待っていた。その後、あらかじめ数えて定められた期間は三日を残して過ぎ去った。殺戮の狼たちは脊椎を叩き割り、肉体と魂を即座に切り離し、死んだ人の体を人々の食料として、楽しい食事として、老いも若きも分け隔てなく分け合うように配慮し、その旨を書き留めていた。貪欲な兵士たちは自分たちの魂のことを、すなわち、死の苦しみの後に魂の運命がどのように定められるのかを、全く意に介さなかった。こういうわけで、彼らは三十日数えた後に必ず談合した。血まみれのあごで人々の体を自分たちの食料として引き裂きたいという彼らの願いは強かった。(138-160)

ところで、強力な力によってこの世を創造なされた方は、ヘブライ人とイスラエル人<sup>9</sup>に対して頻繁に愛情を示した人物が枷に縛られ、悲惨な状態で異国の人々の中に留まっていること、彼がユダヤ人<sup>9</sup>の魔術に強く抵抗したことを覚えておられた。そして、聖者アンデレがいたアカイアでは天から声が聞こえてきた一彼は人々に(永遠の)生命へと至る道を説いていた。輝く王、人類の創造者、万軍の主はこの上なく勇敢な者にみずからの思いを示され、次のよう

---

<sup>8</sup> 「悪霊」のこと。

<sup>9</sup> ヘブライ人、イスラエル人、ユダヤ人という三通りの名称は単なるヴァリエーションであると思われる。

に言葉で語られた。(161-173)

「おまえは食人族が住居を守り、人殺しの技によって国を支配している所へと向かい、危険に挑み、旅して行くべきだ。罪深い者たちが惨めな者をメルメドーニアで見つけたら、そういう見知らぬ者に命を認めないのがその国の人々の流儀である—そこでは、後に死が、悲しむべき人々の殺害が起こることになっている。勝利の誉れ高いおまえの兄が町の住民の間で足枷に縛られ、その国に留められていることを私は知っている。彼がその国の異教徒たちとの戦いで槍の攻撃によって魂を送り出すことになるのは今から三日後だ。おまえはそれまでに着かねばならない。」(174-188)

アンデレは直ちに主に返事をした。「天の創造主であられる輝く神よ、この私が主のお言葉どおり素早く深い(海の)路を越え、はるかな道を越えて旅することがどうしてできましようか？主の聖なる天使なら簡単にやってのけるでしょうが。天使は海の広さ、塩水の流れ、白鳥の通り道、渦巻く波の動き、恐ろしい水、広大な陸の道を空から眺めて分かります。私はその国の支配者たちや勇士たちとは面識がなく、人々が考えていることも全く分かりません。おまけに、私は冷たい海の上の道に全く不案内です。」(189-201)

すると、永遠の神は彼にお答えになられた。「アンデレよ、おまえがこの旅を多少なりともためらうとは嘆かわしいことだ。栄光の主である私が言葉で命じれば、その町は、名高い王国は、住民と共に広い空の下をこの国へと移動してくる。これをこの地上で成し遂げるのは全能の神である私には難しいことではない。もしもおまえが正しくも神との契約、真の印を守ろうとするなら、この旅立ちをためらったり、弱気になってはならない。間に合うよう準備せよ。この使命に遅れは許されない。おまえはこの旅を実行し、獐猛な者たちの手の中へと命を運ばねばならない。その地の異教徒たちの戦の喧騒の中で、兵士たちの戦の技に囲まれ、おまえに闘いが挑まれるであろう。おまえは暁と共に、朝になったら、直ちに浜辺で船に乗り、冷たい水の上を、水浴の道<sup>10</sup>の上を突き進まねばならない。どこへ行こうとも、この世で私の恩寵を受けよ。」(202-224)

そして、神聖な支配者であられる主、天使たちの創造者、この世の守り手は、信仰の厚い者たちの魂が肉体の消滅後に生命を享受できる国へと、栄光の住まいへと立ち去られた。(225-229)

<sup>10</sup>「海、大洋」のこと。

## III

その後、その町で高貴な戦士に使命が告げられた。彼は決して臆病にならず、勇気のいる用務に対して決然としていて、勇敢で遅しく、決してためらわず、戦いに積極的で、神の戦いに万全の構えができていた。それから夜が明けて朝になると、心強き者は家来を引き連れ、砂丘を越え、砂の上を海岸まで歩いて行った。海は波音を轟かせ、潮の流れは激しくぶつかり合っていた。勇敢な戦士は浜辺に幅広い船を見つけて喜んだ。その時、朝の輝き、最も明るい印、聖なるもの、眩しい空のろうそく<sup>11</sup>が暗闇の中から海の上へと、潮の流れの上へと急いでやってきた。彼はそこに船乗りたち、三人の屈強の兵士たち、勇敢な男たちが海を越えてやってきたばかりのように船出の準備を整えて船の上に腰を降ろしているのを見た。それは二人の天使を率いた万軍の支配者、永遠で全能の神ご自身であられた。これらの貴人は、水兵や船乗りが広い海の上を、冷たい水の上を、はるかな道を越えて船で旅する時に身につける服装と似たものを着ていた。(230-253)

そして、浜辺に立っていた者はこれらの人々に声をかけ、船出をはやり、喜んで海岸で話した。「卓越した技の持ち主たちよ、あなたがたは船に乗って、波を切る物、孤独な海の浮遊物に乗って、一体どこから旅をして来られたのですか？潮の流れはうねる波を越えてあなたがたを一体どこから運んできたのですか？」(254-259)

すると、その言葉を待ち受けていた全能の神は彼に答えられた—海岸でアンデレが話しかけたのは言葉を操る人間の中で一体どういうたぐいの人物なのか気づかれないように。(260-263)

「私たちははるかかなたのメルメド—ニアの国から旅して来ました。船首の高い船、水に囲まれた足の速い海の馬<sup>12</sup>が潮の流れにまかせて私たちを鯨の通り道を選んでくれ、風に急かされてやっと波の打ちつける人々の国へとたどり着いたのです。」(264-269)

そこで、アンデレはうやうやしく彼に答えた。「宝物や高価な贈り物は少ししか差し上げられませんが、船首の高い船で、くちばし状の高い舳先の船で鯨の国を越えて目指す国へと運んでくださるようお願いいたします。この航海で

<sup>11</sup> 「太陽」の代称表現 (kenning) の一つ。

<sup>12</sup> 「船」の代称表現の一つ。

ご好意を示していただけましたら、神はあなたがたに報いてくださることでしょう」(270-276)

貴人たちの保護者、天使たちの創造主は波を滑る物<sup>13</sup>から再び彼に答えた。「遠方からの旅人はその国に留まることはできず、異国の民はそこでは生活することはできません。それどころか、遠方からあえてその地に命を運ぶ者はその町で死をこうむることになります。それでもあなたは争いの中で自分の命を滅ぼすためにこれから広い海を越えて行くことを望まれるのですか？」(277-284)

すると、アンデレは彼に返答した。「最も親愛なる方よ、もしも私たちに潮の流れの上でご好意をお示しくださるのでしたら、私たちは喜び勇んで、大きな希望を胸に抱いて、あの国へ、名高い町へと出かけられます。」(285-289)

天使たちの王、人々の救世主は舳先の所から彼に答えた。「船乗りたち、波の板<sup>14</sup>の上の伝令たちがあなたがたに要求する料金、定められた金額を支払ってくだされば、私たちは快く、喜んであなたを私たちと一緒に魚の水浴場<sup>15</sup>を越えて、あなたが行きたいと強く望んでおられる国まで乗せて行きましょう。」(290-298)

そこで、頼る者のいないアンデレは彼に向かってすぐに言葉を返した。「言葉で要求なされたようなあなたの喜び、この世での楽しみを満たすことのできる金の延べ板も宝物も財産も食べ物もなく、腕輪も土地もひねり細工の指輪も、私は何一つ持っていません。」(299-304)

すると、人々の支配者は、舷門に座ったまま、浜辺の盛り上がった砂ごしに彼に言った。「最も大切な友よ、財宝を持たずに、海のそばの崖、潮の流れの果てまで行き、冷たい崖を越えて船を訪れようと望んだのは一体どういうことなのか？航海で慰めとなる食料のパンも、命をつなぐ真水も持っていないのか？長旅に挑む者にとって、航海は生易しいものではないぞ。」(305-314)

心に分別を蓄えたアンデレは返事をするために言葉の宝庫を開けた<sup>16</sup>。「あなたは主から富と食料とこの世での成功を与えられているのに、横柄な態度で非難を交えて私に答えを求めるのはあなたにふさわしくありません。栄光の支配

<sup>13</sup> 「船」のこと。

<sup>14</sup> 「船」の代称表現の一つ。

<sup>15</sup> 「海」のこと。

<sup>16</sup> 「言った」、「語った」の意でよく用いられる。

者であられるキリストが命ぜられたように、旅立ちを願う人に謙虚に親切に接することはだれにとっても大切なことです。私たちキリストの従者は戦士に選ばれています。キリストは正真正銘の王、天の栄光の支配者で創始者、すべての被造物の永遠の神であられる。なぜなら、キリストは最高の勝利者としてみずからの技で、聖なる力で、天と地をすっかり取り囲んでおられるからです。すべての人の父であられるキリストはみずから次のように語られ、広い陸地を越えて魂を救いに行くよう私たちに告げられました。『これから地の果て、海の果てまで遠く、原野の道が行き着くところまで行け。広い陸地を越えて、輝かしい信仰を町から町へ説いて回れ。おまえたちの身を守ってやろう。宝石も金も銀も旅に携えて行く必要はない。おまえたちが望むなら、すべての良き物をたっぷりと与えてやろう。』思慮深いあなたなら私たちの遠征を聞き届けてくださるでしょうから、あなたが私たちのために何をしてくくださるか、私にはすぐに分かります。」(315-342)

すると、永遠の主は彼に答えた。「もしもあなたがたがその言葉どおりこの世で栄光を高められた方の従者であり、聖なる方が告げられたことを守ってこられたのであれば、要望どおり、喜んで潮の流れを越えて運んであげましょう。」そこで、勇敢で大胆な者たちは船に乗り込んだ。だれもかれも洋上で心はずませていた。(343-351)

#### IV

それから、アンデレはうねる波の上で船乗りたちのために栄光の主の慈悲を請い、次のように言葉に出して言った。「栄光の神よ、人類の支配者よ、この度の旅においてご好意を示してくださったように、この世での喜びとあの世での命を与えてください。」(352-358)

そして、この聖なる人は海洋の番人<sup>17</sup>の近くに一貴人が貴人のそばに一腰を降ろした。私はこれまでこれほど高貴な方々を乗せた船の話聞いたことはない。戦士たち、名高い貴人たち、立派な従者たちは船内に腰を降ろした。そして、永遠で全能の力強い王は語られた。主は高名な従者である天使に海の波の上で窮乏している者たちの所へ行って、ざわめく波の上での生活により楽に耐えられるよう、食べ物を与え、慰めるよう命じた。その時、鯨の大洋は荒れ、

<sup>17</sup> 「船長」のこと。

波立った。角状の魚<sup>18</sup>は跳ね、潮の流れの上を泳ぎ、腐肉に飢えた灰色の海かもめは旋回した。空のろうそくは暗くなり、風は強まり、波はぶつかり合い、潮の流れはうねり、索具は音を立て、帆は濡れた。恐ろしい水は万軍のような力で立ち昇った。戦士たちは恐怖におののいた。アンデレと共に船で大海原に乗り出した人々は全員生きて陸にたどり着けるとは思わなかった。彼らにはだれがその船に進路を指示しているのかわからされていなかった。(359-381)

さて、聖なる人アンデレ、主に忠実な従者は、食事を終えると海の道の上で、混ざり合う波の上で強力な指導者に感謝の気持ちを伝えた。「小山のような波の上で私にご厚情と愛を示してくださったことに対して、真の創造主、光と生命の創始者、万軍の統率者がこの食べ物に対する報いをあなたに与えられ、そして、あなたにも食べ物を、天のパン<sup>19</sup>を授けられますように！今、私の従者たち、若い兵士たちは恐れおののいています。海は、波立つ大洋は轟いています。海の底は掻き乱され、深い所から荒れています。高貴な従者の一行は苛立ち、誇り高い者たちの一団は大変苦しめられています。」(382-395)

兵士たちの創造者は海から彼に答えた。「これから水に浮かぶ私たちの船を水の岩<sup>20</sup>を越えて陸地まで運ばせましょう。そして、あなたが戻ってくるまで、あなたの兵士たち、供の者たちを陸で待たせることにしましょう。」(396-400)

兵士たち、辛抱強い従者たちは直ちに彼に答えた—彼らは親しい主人を舐先のそばに置き去りにして、自分たちは上陸するという事に承知できなかった。「もし私たちがあなたを見捨てたら、指導者をなくし、悲しみに沈みながら、所持品を奪われ、罪に傷つけられて、どこへ行けばよいのでしょうか？戦場で争い合う最中に手と盾が剣で傷つけられて苦境に立たされた時、戦で主人に一番立派に仕えたのはだれだったかを勇敢な人の子たちが話題にする時、私たちはどの国でも敵視され、人々に軽蔑されることでしょう。」(401-414)

その時、高貴な主、契約を守る王は直ちに口を開き、言葉を発せられた。「あなたが言葉で主張するとおり、天に住まわれる栄光の王の召使いなら、神が空の下で言葉を操る者<sup>21</sup>に神秘をどのように教えられたか語ってみなさい。黄色

<sup>18</sup> 古英語の hornfisc 'hornfish' はここで用いられている一例のみ確認されているが、たぶん「めかじき」(swordfish) や長い物をもつ細長い硬骨魚を指すものと思われる。hornfisc 'whale' の音位転換形とみなす説もある (Brooks 1961:75)。

<sup>19</sup> 精神的な「心の糧」の意。

<sup>20</sup> 「力強い海」の意。

<sup>21</sup> 「人」のこと。

い海を越えて行くこの旅は長く続く。従者たちの心を慰めてあげなさい。潮の流れを越えて行く旅はまだまだ遠く、たどり着く陸地ははるかかなたにあります。海は乱され、海の底は砂を巻き上げている。神は勇ましい航海者たちにたやすく援助の手を差し伸べることができます。」(415-426)

さらに、神は思慮深くも自分の従者たちを、栄光にあふれる人々を言葉で励まされた。「あなたがたが大洋に船を乗り出した時、敵の国へ命を運び、神への愛ゆえに死を覚悟し、異国の領地で命を捨てる決心をしました。私自身は天使たちの創造主が、万軍の王が私たちを守ってくださることを知っています。恐ろしい水、荒れ狂う海は栄光の王によって押さえられ、抑制されて穏やかになるに違いありません。かつて私たちは船に乗って荒れる波を越え、水を切って進み、波に挑んだことがありました。恐ろしい海の道は危険に満ちているように見え、潮の流れは船べりを激しく打ち、黒い波はしばしばぶつかり合って轟きました。時おり恐怖が海の底からわき上がり、船を越えて船内までみなぎりしました。人類の全能の支配者は栄光に包まれて船の中におられました。戦士たちは心の底から恐れ、偉大な方に安全と慈悲をお願いしました。一行の者たちが船の上で叫び声を上げた時、天使たちへの幸福の授与者であられる王は直ちに立ち上がられ、うねる大波を、波立つ海を鎮められ、風を懲らしめられた一海は静まり、広大な潮の流れは穏やかになった。風と波と恐ろしい海が神を恐れて広い空の下で怖気づくのを見て、私たちは心から喜んだ。それゆえ、人々に勇気がみなぎっている時は、現人神<sup>22</sup>は決して人々を見捨てられることはないということをあなたがたに真実として告げたい。」(427-460)

みずからの行為に思慮深い聖なる戦士<sup>23</sup>はこのように語られた一完全無欠な闘士は従者たちを諭し、貴人たちを激励なされた。やがて、疲れ果てた彼らは帆柱のそばで睡魔に襲われた。海は静まり、波の攻撃、荒々しい潮の上下動も去った。そして、恐怖の時が過ぎ去ると、聖者の心は弾んだ。(461-468)

その時、賢明な助言を与え、理性に富んだ者<sup>24</sup>は語り、言葉の宝庫を開いた。「私はこれまであなたのように航海術に長けた船乗り、勇敢な舵手、適切な助言ができる言葉使いの慎重な人に会ったことがありません。お名前は存じあげませんが、勇士であられるあなたにもう一つだけお願いがあります。指輪や高

<sup>22</sup>「キリスト」のこと。

<sup>23</sup>「神」のこと。

<sup>24</sup>アンデレのこと。

価な贈り物や板状の宝物は差し上げられません、偉大な方よ、許されるのでしたら、あなたの良き友情をいただきたいのです。もしあなたが航海に疲れた者たちに親切に指導してくださるのなら、あなたは天の栄光の中で贈り物を、聖なる喜びを受けられるでしょう。高貴な勇者よ、あなたに一つの技をお尋ねしたい—あなたは人類の創造主であられる王から栄光と力を授けられていますから、あなたが海水に濡れて波に漂う物、海の馬にどのように進路を定められたのか、その技を。私は今回の分も含めてこれまでに十六回船に乗って海に出ました。そして、海の潮の流れを越えて行く時に手に凍傷を負いました。今回も同じことです。しかし、あなたのような人、立派な若者、勇者が船首の上で巧みに舵を取るのにこれまで一度もお目にかかったことはありません。大洋の波は荒れ狂い、海岸に激しくぶつかっています。この船はとても迅速で、船首を泡だらけにして鳥のように進み、海の上を滑って行きます。はっきりと分かることは、これまで大波の通り道の上で、船乗りたちの中にこれに勝る技を自分が見たことがないということです。この船はまるで陸地に動かずに立っているかのようで、嵐も嵐も揺さぶることはできず、潮の流れも高い舳先の船を砕くことはなく、大海原を帆を張って迅速に進んでいます。兵士たちの守り手よ、あなたは若く、歳を重ねて老いてはいけません。しかし、航海者よ、あなたは勇者としての答えを胸に秘めておられます。あなたはこの世におけるすべての言葉の聡明な意味を知っておられます。」(469-509)

永遠の神は彼に答えられた。「航海の途中に嵐がやって来ても、乗組員を乗せて船内で、海の馬にまたがって、水浴の道を越えて疾走するということがよく起こります。船旅をものともせず、危険を切り抜けたとしても、波の上で、大洋の上で難儀するということも時には起こります。もっとも、波打つ海も創造主の意に反してすべての人を徹底的に邪魔することはできません。打ち寄せる波を抑えられる方はその命を支配し、暗い大波を鎮め、脅される。天空を掲げ上げ、形を整え、維持し、その輝く蒼の館を栄光で満たされた方は、人々を正しく支配なさる。このようにして、天使たちの故国は主だけの力によって祝福されました。あなたが聖霊の恩寵を受けていることを、大洋が、広々とした海が直ちに認めたことから、あなたは栄光の座にあられる王の優れた従者であることが紛れもない真実として明白となり、知れ渡り、認められるでしょう。潮は、海の波の騒ぎは退き、深く広い大波の恐怖は薄れました。波は、強い力によって栄光の天を確立なされた神が契約に従ってあなたを包み込んでおられることに気づいた時、穏やかになりました。」(510-536)

すると、誇り高い兵士は聖なる声で叫び、王を、栄光の支配者を称え、次のように言葉に出して言った。「人類の支配者、救世主であられる主よ、祝福あれ！遠くであれ近くであれ、主の栄光は永久不滅です。主の名は神聖であり、人々の間で栄光に飾られ、恩寵ゆえに称えられています。人々の支配者、魂の慰安者がどれほど見事に恩寵を与えられるかを述べたり数えたりできる者は、人間の中に、天空の下のすべての種族の中には一人もいません。魂の救済者よ、あなたが心と言葉の優れたこの若者に好意を示され、この青年を恩寵によって称えられたのは確かです。同じ歳の者の中で、彼より優れた知恵を心に秘めた者に出会ったことはありません。」(537-554)

その時、栄光の王は船から彼に答えられ、初めと終わり<sup>25</sup>(の方)は直ちに尋ねられた。「思慮深い従者よ、神を信じない者たち、ユダヤの一族の者たちが邪な考えから神の御子に対して軽蔑的な言葉を発するということが人々の間でどうして起こったのか、ご存知なら教えてください。その時、腹を立てた邪悪で惨めな者どもは自分たちの命の創始者を信じず、また彼が神であられることも信じなかったのです。彼が明白で目に見える数多くの奇跡を群衆に示されたにもかかわらず、罪深い者たちは、人類を、地上に住むすべての者を保護し、慰めるために生まれてこられた神である御子を認めることはできませんでした。高貴な方は分別豊かになりましたが、輝く主は邪悪な人々の前で奇跡を起こされることは一度もありませんでした。」(555-571)

そこで、アンデレは彼に答えた。「人々の中で最も親しい人よ、救世主の力を、支配者の御子である彼が恩寵をこの世の隅々にまで示された様子を、あなたが全く聞いていないということがどうして人々の間で起こりえたのでしょうか？彼は、口のきけない者には言葉を、耳の聞こえない者には音を与えられた。手足が不自由なため、つらいことに長い間病気になる、苦痛に縛られていた不具者や癩病人には心の喜びを与えられた。町々の目の悪い者は目が見えるようになった。同様に、彼はこの世の多くのさまざまな種族の人々を言葉によって死からよみがえらせられた。また、高名な彼は技の力によって多くの驚異を示された。彼は大勢の目の前でみずから作られたぶどう酒を清め、それを人々の喜びとして性質の良いものへと変わるよう命じられた。同じように、彼は一匹

<sup>25</sup> 古英語では *fruma ond ende* 'beginning and end' となっている。ここでは 'the Alpha and Omega' の意。「ヨハネの黙示録」(第一章八節)で神は自分のことを「私はアルファであり、オメガである」と述べている。

の魚と五切れのパンから五千の人々を養いました——一行は悲しみに沈んで腰を降ろし、旅の後で疲れ果てた人々は休憩に喜び、地面の上で最も楽しく思える食事をとりました。さて、最も親しい若者よ、私たちがこの世で生きている間、栄光の守り手は言葉と行為によって私たちを愛され、教えによって私たちを快い喜びへと導かれる様子をあなたは理解できるでしょう。死後に神の元を訪れる幸運な人々は、天使たちと共に自由にそこで住居を構えることができます。」(752-600)

### 参考文献

- Brooks, Kenneth R. (ed.) 1961. *Andreas and The Fates of the Apostles*. London: Oxford University Press.
- Cook, A.S. et al. (transl.) 1970. *Translations from the Old English*. Hamden: Archon Books.
- Gordon, R.K. (transl.) 1954. *Anglo-Saxon Poetry*. (Everyman's Library 794) London: Dent & Dutton.
- Hazome, Takeichi (羽染竹一)。(編訳) 1985. 『古英詩大観』 東京、原書房。
- Krapp, George Philip. (ed.) 1932. *The Vercelli Book*. (The Anglo-Saxon Poetic Records Vol.II) New York: Columbia University Press.